

地域生活を見える化する～COMHBOの新たな試み

医療福祉ジャーナリズム分野 博士課程 松田美恵子

医療福祉の世界は絶え間なく進化していて、新しい感性の担い手が次々と現れることを、ゆきさんの授業に出るたびに思い知らされています。恥ずかしながら、COMHBOの名前や活動を知ったのは初めてでした。

精神科医療を見える化する、という発想もすばらしいですが、それを実現化するアイデアや手法もすばらしく、製薬会社でのお仕事の賜物と思われます。それを、患者サイドの活動に活かしていच्छやることに敬服します。

私が最も感銘を受けたのは、地域生活の計測に関する部分です。講義では時間切れで聞けなかったのですが、終了後、直接、調査の趣旨や方法をお聞きすることができました。

精神科医療の効果は、当事者が地域生活を継続できることに現れる、それは、“その人が生活の多くの時間を何に充てているか”、によって示すことができる、ということだと私なりに理解しました。“人生を何に最も多く費やしているか、ということですね”、とお聞きしたら、そうだとお答えいただきました。

その背後には、仕事を始めると状態が良くなることが多い、という経験則があり、それは、おそらく役割ができたり人とコミュニケーションしたりするためだろうというご説明も伺うことができました。

入院や外来の医療の効果測定は、その人の地域生活で計測されるべきだという当たり前のことに初めて気がつきました。これまでは、症状の消失、ということにしか目が向いていませんでした。

そもそも資料の「精神疾患の生活者に与える影響」というタイトルに目を引かれたのは、自分が女性相談の仕事に携わっていて、在宅で精神疾患を持っている方が如何に多いかを、日頃から感じていたからです。

精神疾患が、在宅の人の様々な“生きづらさ”に相当程度、影響していることは想像に難くありません。しかも、病識のない人も多い。

COMHBOで実施される調査は、治療後の方々の指標だと思うので、少し違いますが、いずれにしても、地域での精神疾患の方の生活行動を見える化することは、これまでになく、大変価値あることだと思います。

社会生活基本調査をモデルに会員の方にアンケートすると伺いました。何かの機会に結果を拝見できれば、とても有難いです。

今後も、新たな展開と発展をお祈りします。

